

日本人英語学習者の自律学習方略に関する一考察：

英・日プレゼンテーションの事前準備に関して

仁 科 恭 徳 桐 村 亮
吉 村 征 洋

要 旨

本論文の主目的は、一般英語科目を受講した学生へのアンケート調査の結果から、英・日プレゼンテーションに向けた学習者の自律学習を調査することにある。具体的には、最終的なプレゼンテーションの実施までに学生が自律的に行った「英語の読み」に関する学習方略や、種々の事前準備が本番のプレゼンテーションにどのような影響を与えているのかを調査することにある。特に、準備段階で学生が選んだ学習方略の調査や、プレゼンテーションの評価と事前に学生が取り組んだ各学習項目との関連性、日本語による発表と比較した場合の英語による発表の留意点などを中心に論じる。

キーワード：プレゼンテーションにおける言語選択、アンケート調査、事前準備、英文の読み

1. はじめに

本稿では、日本人英語学習者（大学生）に実施した英語プレゼンテーションに関するアンケート調査の結果を基に、今後期待される実践的な英語プレゼンテーション力強化のための学習方略の一例を提示する。詳しくは、プレゼンテーションの準備のために実施した「英文の読み方」が実際の発表評価にどう影響するのかを本調査の主目的とし、選出したトピックに関するインターネット等での事前調査や、時間配分の考慮、効果的なハンドアウト・パワーポイントスライドの作成など、「英文の読み」以外で想定される他要因の影響に関しても合わせて調査する。

特に、仁科（2010）の英語プレゼンテーション教材の使用者アンケート調査では、使用者（ここでは主に大学英語教員）が求める英語プレゼンテ

ーション教材の内容とは学習者の「自律性の促進」であることが分かっており、プレゼンテーション実施当日までに各学生が自律的に実施した準備内容と実際の評価を比較することで、効果的且つ実践的な自律学習項目は何かを紐解くことが可能となる。

2. 英語プレゼンテーションのニーズとは

2003年に文部科学省が発表した「英語が使える日本人育成の戦略構想」に基づき、現在、日本の大学英語教育の現場においても、文法や読み書き重視の教育から運用力重視の教育への移行期にある。このような日本の英語教育の潮流に疑問を呈する者も少なくないが、現在の国際社会では、実用レベルで英語が使える人材育成に期待が高まっているのは事実である。深山他（2003）も指摘するように、業務で英語が使える能力とは英語のテストで高得点を獲得するような受動的能力を指す

のではなく、実際の現場の形態に応じて適切に英語コミュニケーションを実施できる発信の能力にこそある。つまり、幸重他(2007)が示唆するように、英語の発信能力にこそ現在の国際社会や企業のニーズがあり、大学の英語教育においても同スキルを向上させるような授業の実施が急務であろう⁽¹⁾。例えば、英語能力判断テストの一種であるTOEICにおいても、2007年度から発信能力を評価するスピーキングとライティングテストの実施が始まった。

しかしながら、他の英語スキルと比較した場合、大学生を対象とした英語プレゼンテーション関連の研究は少数にとどまっており、仁科(2010)にもあるように英語プレゼンテーションに特化した教材の数も散見できる程度である。よって、英語プレゼンテーションの学習方略や使用教材等の妥当性・効率性の研究、並びに教材開発等はこれからの大学英語教育研究の課題であるとも言える。また、社会的ニーズが高まっている英語プレゼンテーション力強化のための学習方略の要因を探求することは、コミュニケーション力向上を謳う現在の英語教育の潮流に合致していると言えよう。

3. 分析データ

3.1. 調査対象とアンケート調査内容

本稿の分析では、日本人英語学習者(大学生)計143名(欠損値を持たないサンプル)を対象に実施したアンケート調査のデータを用いる。一つ目は英語プレゼンテーション授業の終了時に各学生に実施した「発表課題アンケート」であり、二つ目は各学生のプレゼンテーション時に評価者となる聴衆(クラスメート)が評価目的で使用した「発表課題評価シート」である。尚、調査対象(N=143)は、日本語プレゼンテーション群(以

下、日本語群)77名と英語プレゼンテーション群(以下、英語群)66名で、この2群を比較することで「英文の読み」等の学習方略が英語プレゼンテーションを実施する場合にどのような効果があるのか、日本語プレゼンテーションのデータと比較する⁽²⁾。

3.2. アンケート調査内容項目

プレゼンテーションの準備のために学生が自律的に実施した学習内容や学習態度を調査するために、アンケート調査の内容をいくつかの項目に分類した。具体的には、全体的な質問が計8種(A1-A8)、「英文の読み」に関する質問項目が計25種(B1-B25)、「その他」に振り分けられた質問項目が計11種(C1-C11)である。論末の脚注に「発表課題アンケート」の簡略版のサンプルを添付しているので、本節以降、適時そちらも参照されたい⁽³⁾。

また、「発表評価シート」では全体評価(Total Value)に付け加え、内容面と伝達面に関する評価を各3項目ずつ設定した。以下は「発表課題評価シート」に設けた評価項目である。

回答者には、「発表課題アンケート」の質問Aでは「あてはまる」(5点)～「あてはまらない」(1点)、質問項目BとCでは「かなり必要」(5点)～「必要でない」(1点)の5段階で、「発表評価シート」では「良い」(5点)～「良くない」(1点)の5段階で回答をお願いした。厳密に言えば、順序尺度を数量化して間隔尺度データとして処理することには問題があるが(また、このような質的データの平均点を算出しても意味がないと指摘するものもあるが)、5件法以上の順序尺度は間隔尺度とみなしても大きな影響はないとされているので(三浦他, 2004, p.45)、これらの回答スコアを分析データとして使用する。

発表評価シートの評価項目

(Content)	内容の要点をしっかりと理解して伝えていた
(Content)	内容について、自分の考えや感想を述べていた
(Content)	教科書以外の関連情報を効果的に含めていた
(Delivery)	伝え方がうまかった（声、速度、流れ、アイコンタクト、聞き手への配慮など）
(Delivery)	発表資料が効果的に使われていた
(Delivery)	内容に関する質問に対して、納得できる回答があった
(Total Value)	全体を通して、ためになる発表であった

3.3. 正規性の検定と分散の検定

独立した2群の比較には t 検定が有効であるが、 t 検定の前提条件には主に母集団が正規分布に従っていること（正規性）と、2つの母集団の分散が等質であること（分散の等質性）が挙げられる（和田, 1999）。しかしながら、標本の数が多いとき（例えば50~100個以上の数量データ）は正規分布に従っているとみなす研究も多く（逆に、例えば標本数が20個以下など著しく少ないときには正規分布と見なす考え方もある）、また5段階評価などのアンケート調査では平均点が3に近いと正規分布とみなす研究さえある（この場合の平均点3の解釈には、3を選択した人が多いからなのか、2と4を選択した人が多いからなのか判別不能で、厳密には誤りであろう）。よって、一般的には、このような t 検定の前提条件を厳密にチェックする必要はないという意見も多い（和田, 1999）。

しかしながら、本稿では研究の真正性を追求すべく、初めに統計的に正規性と分散の等質性を調査し、調査データが t 検定の前提条件をある程度満たすことを初めに提示したい。尚、正規性の検定には Microsoft EXCEL で手計算が可能な Jarque-bera 検定を使用し、分散の等質性の検定には同じく EXCEL にデフォルトで組み込まれている F 検定を使用した。両者共に統計ソフト

を用いずとも検定可能であることから、その汎用性は高いと言える。

まずは、各質問間の Jarque-bera による正規性検定の結果である。JB 検定統計量は自由度2のカイ二乗分布に従うので、有意水準5%の場合、5.911より値が小さければ正規分布とみなすことができる。表1は日本語群、表2は英語群のJB検定の結果を示す。尚、参考までに、「発表課題評価シート」の日本語群における Total Value の SKEW は -0.085、KURT は -0.748 で JB 検定の p 値は 2.133、英語群における Total Value の SKEW は -0.020、KURT は -0.902 で JB 検定の p 値は 2.244 となり、両者共に正規性に従っている結果となった。また、表1と表2において、正規性が T の項目は正規分布に従っていることを示す。

次は、2群間の分散の等質性の検定である。表3は、日本語群・英語群における F 検定の p 値の結果である。尚、2群間における「発表課題評価シート」の Total Value の F 検定では、 p 値が .000 となり分散の等質性は認められなかったが、表3が示すようにほとんどの質問項目では分散の等質性が確認できる。

以上の結果から、多くの質問項目が正規分布に従い、また2群間において分散の等質性が認められることから、各アンケート質問項目における2群間の異なりを概観するために、次節では t 検定を用いた分析を試みる。

表1 日本語群におけるJB検定の結果

質問#	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	B 1	B 2
SKEW	-.657	-.368	-.290	.098	-1.182	-1.115	-.156	4.747	-.793	-1.170
KURT	.191	-.309	-.434	-.372	1.082	1.790	-.876	28.545	-.133	1.224
JB	5.648	2.038	1.682	.566	21.686	26.221	2.735	2827.958	8.121	22.369
正規性	T	T	T	T	F	F	T	F	F	F
質問#	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10	B 11	B 12
SKEW	-.542	-1.294	-1.416	-.916	.115	-.672	.160	-.889	-.946	-.201
KURT	-.441	.917	1.594	.542	-.921	.698	-1.000	-.240	.459	-.424
JB	4.391	24.179	33.900	11.699	2.890	7.361	3.537	10.328	12.158	1.095
正規性	T	F	F	F	T	F	T	F	F	T
質問#	B 13	B 14	B 15	B 16	B 17	B 18	B 19	B 20	B 21	B 22
SKEW	-1.066	-1.050	.480	.544	-.939	-.514	-1.173	-1.021	-.240	-1.377
KURT	.636	.767	.054	-.337	1.218	-.100	.788	.437	-.919	2.392
JB	15.891	16.032	2.963	4.162	15.869	3.339	19.387	13.811	3.400	42.676
正規性	F	F	T	T	F	T	F	F	T	F
質問#	B 23	B 24	B 25	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7
SKEW	-.757	-.324	-.975	-1.473	-1.761	-.988	-1.335	-1.315	-1.024	-.976
KURT	.691	-.659	.801	2.530	2.189	.441	1.794	.786	.298	.237
JB	8.877	2.739	14.256	48.370	55.184	13.141	33.204	24.183	13.738	12.392
正規性	F	T	F	F	F	F	F	F	F	F
質問#	C 8	C 9	C 10	C 11	EC 1	EC 2	EC 3	ED 1	ED 2	ED 3
SKEW	-.735	-.832	-.637	-.781	-.775	-.618	-1.077	.041	-.203	.207
KURT	-.550	-.017	-.737	-.392	.418	-.189	.510	-1.027	-1.215	-1.060
JB	7.908	8.874	6.952	8.312	9.336	5.666	17.750	3.848	5.948	4.695
正規性	F	F	F	F	F	T	F	T	T	T

表2 英語群におけるJB検定の結果

質問#	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	B 1	B 2
SKEW	-.945	-.603	-.197	.313	-.333	-.908	-.950	.674	-.602	-1.012
KURT	.852	.411	-.609	.029	-.195	.398	1.224	.549	-.620	.410
JB	11.826	4.467	1.447	1.032	1.305	9.501	14.041	5.827	5.043	11.737
正規性	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
質問#	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10	B 11	B 12
SKEW	-.435	-1.331	-.689	-.525	-.169	-.541	-.237	-.959	-.594	.155
KURT	-.948	2.223	.087	-.252	-.798	-.446	-.397	1.002	-.423	-.241
JB	4.555	33.076	5.242	3.204	2.065	3.766	1.032	12.883	4.368	.426
正規性	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
質問#	B 13	B 14	B 15	B 16	B 17	B 18	B 19	B 20	B 21	B 22
SKEW	-.734	-.903	.389	.804	-.377	.105	-.600	-.262	-.331	-.626
KURT	.381	-.688	-.005	-.053	-.445	-.598	-.159	-.828	-.449	-.432
JB	6.322	10.266	1.661	7.017	2.072	1.103	4.030	2.641	1.757	4.830
正規性	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
質問#	B 23	B 24	B 25	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7
SKEW	-.880	-.649	-.761	-.395	-.544	-.486	-1.278	-1.619	-.769	-.360
KURT	.817	.030	.568	-.553	-.752	-.322	1.575	2.146	.171	-.864
JB	10.353	4.632	7.255	2.561	4.809	2.886	24.778	41.504	6.593	3.478
正規性	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
質問#	C 8	C 9	C 10	C 11	EC 1	EC 2	EC 3	ED 1	ED 2	ED 3
SKEW	-.224	-.367	-.399	-1.119	-.135	-.476	.393	-.043	-.388	1.160
KURT	-.947	-.499	-.998	.906	-1.010	-.648	-1.210	-.388	-.635	.121
JB	3.019	2.167	4.486	16.016	3.005	3.643	5.729	.436	2.769	14.835
正規性	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T

表3 F検定のp値(両側検定)

質問#	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8	B 1	B 2
p 値	.561	.502	.042	.553	.447	.199	.563	.000	.191	.266
等分散	T	T	F	T	T	T	T	F	T	T
質問#	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10	B 11	B 12
p 値	.510	.063	.027	.291	.428	.759	.183	.261	.532	.782
等分散	T	T	F	T	T	T	T	T	T	T
質問#	B 13	B 14	B 15	B 16	B 17	B 18	B 19	B 20	B 21	B 22
p 値	.783	.125	.644	.855	.528	.144	.414	.164	.357	.584
等分散	T	T	T	T	T	T	T	T	T	T
質問#	B 23	B 24	B 25	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7
p 値	.648	.601	.533	.127	.097	.717	.764	.001	.077	.563
等分散	T	T	T	T	T	T	T	F	T	T
質問#	C 8	C 9	C 10	C 11	EC 1	EC 2	EC 3	ED 1	ED 2	ED 3
p 値	.701	.018	.845	.980	.000	.000	.001	.000	.596	.002
等分散	T	F	T	T	F	F	F	F	T	F

* 等分散がTの項目は、2群間において分散が等質であることを示す。

4. t検定による日本語群と英語群の比較

本節では、「発表課題アンケート」と「発表課題シート」の各質問項目において日本語群と英語群の比較を試みる。前者はその内容から大きく分けて計3種の質問群からなり、以下、質問群ごとに分析結果を提示する。尚、t検定の各群の平均値、変化量、t値などは紙幅の関係から省略し、p値のみを示す。

4.1. 「発表課題を振り返って」の調査 (A 1-A 8)

表4は、「発表課題を振り返って」に関する全8項目の質問に関して、日本語群と英語群のt検定のp値を示している(論末の脚注に添付したアンケートサンプルの質問内容と照らし合わせて

確認されたい)。尚、前述したように質問項目A 1-A 7までは5件法(あてはまる～あてはまらない)で回答して頂き、A 8は具体的な時間(単位で)を記して頂いた。

表4から、質問項目A 3, A 5, A 8において5%水準で有意差が見られた。「発表の対象がクラスであること」(A 3)では英語群の方が意識的に取り組んでいること、逆に「これまでの英語学習の取り組み姿勢の違い」への気づき(A 5)や「発表準備時間」の量(A 8)はむしろ日本語群の方が意識していることが分かった。前者(A 3)に関しては、大学以前の学校教育(特に中・高)において、日本語を使って人前で何かしら話す機会があったことから、日本語プレゼンテーションには既に慣れていることが想定される。しかし、英語プレゼンテーションとなると大学以前に経験

表4 日・英語群間におけるt検定のp値(質問項目A)

項目	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8
p 値	.063	.229	.037	.341	.001	.190	.912	.001
有意差	ns	ns	J<E	ns	J>E	ns	ns	J>E

していない方が一般的であろう。これが、英語群の方が逆に聴衆を敏感に意識する結果になった理由ではなからうか。また、「これまでの英語学習との取り組み姿勢の違い」(A5)に関しては、読み書き中心であった高等学校までの英語学習とは一変し、今まで経験したことのないプレゼンテーション準備などの英語を超えた $+α$ の作業が必要だったことが理由ではなからうか。つまり、日本語でのパワーポイントスライド作成など「英語学習」とはかけ離れた準備も日本語群の方では必要であったために、この項目では英語群と有意な差が認められたと考えられる。そして、「発表準備時間」の量(A8)に関しては、日本語群においては事前準備として英語から日本語への「訳読」作業が増えるために、英語で英語を理解しようと試みる英語群に比べると有意差があるのも納得がゆく。

4.2. 「英文の読み」の調査 (B1-B25)

次に、「英文の読み」に分類された全25質問項目における2群間の t 検定の p 値を表5に示す。

表5から、「全ての英語を日本語に訳す」(B3)は日本語群で有意に高いことは自然な結果であろう。また正確に訳出するには「辞書や文法書を有効に使う」(B10)ことが有効であり、訳した「内容を日本語で要約する」(B25)ことは、日本語群では必須事項であるとも言える。逆に「辞書

は使用せずに文脈から意味を推測しながら読む」(B9)が英語群で多いことは、英語を英語で理解し、その内容を英語で伝えるという英語プレゼンテーションの特性を勘案した効果的な学習準備であるとも理解できる。その結果として、「内容を英語で要約する」(B24)が英語群で多いことも考慮に入れると、プレゼンテーション時の使用言語の異なりによって、学習者が採用する準備方法や学習態度は自然と異なっていることが分かる。この結果、教員側が特段指示を与えなくても、学習者は自らの自律的観点からその学習方略を身につけているとも解釈可能である。

4.3. 「その他」の調査 (C1-C11)

「発表課題アンケート」では、プレゼンテーションの準備に際して「英文の読み」には分類されない他の学習内容に関する項目も含まれる。表6はこのような「その他」に分類された全11質問項目における t 検定の p 値をまとめたものである。

2群間で有意差(日本語群>英語群)が見られたのは「チーム内で役割分担や段取りについて話し合う」(C2)、「オーディエンスからの質問をあらかじめ想定して、答えを準備する」(C3)、「発表原稿(発表時に話す内容のメモ)をしっかりと書く」(C6)、「発表の時間配分(20分間の内訳や流れなど)を考える」(C7)、「チーム内で英文の理解に誤りがいないか確認しあう」(C8)の5項

表5 日・英語群間における t 検定の p 値(質問項目B)

項目	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	B8	B9	B10	B11	B12	B13
p 値	.417	.309	.000	.943	.916	.943	.119	.265	.036	.003	.825	.928	.298
有意差	ns	ns	J>E	ns	ns	ns	ns	ns	J<E	J>E	ns	ns	ns
項目	B14	B15	B16	B17	B18	B19	B20	B21	B22	B23	B24	B25	
p 値	.133	.913	.878	.969	.631	.186	.434	.958	.475	.663	.000	.016	
有意差	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	ns	J<E	J>E	

表6 日・英語群間における t 検定の p 値 (質問項目 C)

項目	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10	C11
p 値	.286	.001	.019	.759	.143	.019	.036	.024	.797	.364	.937
有意差	ns	J>E	J>E	ns	ns	J>E	J>E	J>E	ns	ns	ns

目であり、グループ内での協力姿勢や個々の学習態度に起因するものが多い。この要因の一つは、日本語という母国語のアドバンテージから、プレゼンテーション実施日までの学習者負担が英語群に比べて軽く、グループ内でも学習内容を議論しやすいという理由が考えられる。逆に言えば、日本語でプレゼンテーションする場合と比較し、英語でプレゼンテーションを実施する場合、学生の学習準備にかかる負荷が重くなり、このことが原因でグループ内での協調学習においてもある程度の困難性・複雑性が認められると言えよう。この意味では、学生に英語でプレゼンテーションを実施させる場合に、教員側が「どのような点に関して注意し、どのような点に関して仲間と協調して学習を進めるべきか」などの観点を予め設定しておいてあげた方が、学習者の負担が軽減されることが予測される。

4.4. 「発表課題評価シート」の調査

「発表課題評価シート」では、前述したように内容面と伝達面において各3項目ずつの評価項目を設け、最終的な Total Value (全体評価)「全体を通して関心が高まる有益な発表であった」も含め5段階で評価して頂いた。表7は評価シートの各評価項目における2群間の t 検定の p 値の結

果である。

「発表課題アンケート」の結果とは異なり、「発表課題評価シート」では英語群の方が顕著に有意になった項目が多く、内容面に関しては「内容の要点をしっかりと理解して伝えていた」(EC1)、伝達面においては「伝え方がうまかった(声、速度、流れ、アイコンタクト、聞き手への配慮など)」(ED1)、「ハンドアウト・発表資料等が効果的に使われていた」(ED2)、「内容に関する質問に対して、納得できる回答があった」(ED3)において有意差が確認された。このような結果になった理由として、慣れない英語による伝達では日本語よりもプレゼンテーションの善し悪しが露出しやすく、入念な準備を怠れば発表者の伝達や、聴衆の内容理解に大きく影響を及ぼすことが考えられる。日本語だと、発表時に柔軟に対応できることであっても、英語で発表となれば想定外の状況(英語による不意な質問など)において即座に対応できないのが現状ではなかろうか。同時に、英語群では使用言語が英語であることから考えても、評価者である聴衆が日本語群より意識して伝達内容の理解に努めていたことが想定され、分かりやすい伝達と分かりにくい伝達がより顕著になったと言えよう。

表7 日・英語群間における t 検定の p 値 (質問項目 EC・ED・Total)

項目	EC1	EC2	EC3	ED1	ED2	ED3	TOTAL
p 値	.000	.154	.495	.000	.043	.000	.000
有意差	J<E	ns	ns	J<E	J<E	J<E	J<E

5. 相関行列

次に、日本語群と英語群における「発表課題アンケート」と「発表評価シート」の各質問項目の相関係数を概観する。前述したように日本語群では欠損値を持つサンプルも合わせると計 87 名、英語群では 68 名となり、相関係数算出にあたっては欠損データを推定する方針を採った（尚、欠損データの推定には、統計ソフトの平均・最頻値を指定した）。柳井・岩坪（1976）では、相関係数が統計量として十分安定したものになるには少なくとも 60 ほどのサンプルが必要であることを指摘しているが、

日・英両群においてこの基本条件はクリアしている。

5.1. 記述統計量

表 8 は日本語群、表 9 は英語群の記述統計量を示す。また、表 8 と表 9 のデータを基に、表 10 から表 15 にかけて日本語群と英語群における「発表課題アンケート」の各質問項目と「発表評価シート」の各項目の相関係数を示す。尚、これらの表において太字部分の相関係数は $p < .05$ で有意に相関している質問項目ペアを示す。全体的に高い相関関係にある項目はあまり見受けられないが、それでもいくつかの興味深い発見がある。

表 8 記述統計量（日本語群）

質問 #	最小値	最大値	平均	標準偏差	度数	質問 #	最小値	最大値	平均	標準偏差	度数
A 1	2	5	4.03	.76	87	B 19	1	5	4.05	1.02	87
A 2	2	5	3.71	.79	87	B 20	1	5	4.09	.93	87
A 3	1	5	3.68	.91	87	B 21	1	5	3.33	1.18	87
A 4	1	5	3.07	.97	87	B 22	1	5	4.33	.78	87
A 5	1	5	4.08	.95	87	B 23	1	5	4.07	.81	87
A 6	1	5	4.16	.79	87	B 24	1	5	3.13	1.04	87
A 7	2	5	3.49	.88	87	B 25	1	5	4.16	.85	87
A 8	0	36	4.24	4.40	87	C 1	1	5	4.26	.87	87
B 1	1	5	3.92	1.02	87	C 2	3	5	4.70	.53	87
B 2	1	5	4.17	.87	87	C 3	2	5	4.27	.77	87
B 3	1	5	3.68	1.05	87	C 4	2	5	4.52	.62	87
B 4	1	5	4.08	1.11	87	C 5	3	5	4.68	.49	87
B 5	1	5	4.27	.90	87	C 6	2	5	4.30	.79	87
B 6	1	5	4.03	.89	87	C 7	2	5	4.33	.75	87
B 7	1	5	3.07	1.11	87	C 8	3	5	4.42	.64	87
B 8	1	5	3.95	.81	87	C 9	1	5	3.90	1.05	87
B 9	1	5	2.90	1.21	87	C 10	2	5	4.25	.77	87
B 10	2	5	4.30	.79	87	C 11	2	5	4.08	.91	87
B 11	1	5	4.07	.91	87	EC 1	2.40	4.60	3.73	.50	87
B 12	1	5	2.91	.96	87	EC 2	2.50	4.21	3.56	.46	87
B 13	1	5	4.03	.98	87	EC 3	2.35	4.55	3.83	.56	87
B 14	1	5	4.21	.87	87	ED 1	2.35	4.07	3.19	.50	87
B 15	1	5	2.35	.91	87	ED 2	2.58	4.24	3.43	.49	87
B 16	1	5	2.26	1.04	87	ED 3	2.63	4.45	3.43	.48	87
B 17	1	5	3.76	.89	87	TOTAL	2.73	4.45	3.60	.44	87
B 18	1	5	3.67	.93	87						

表 9. 記述統計量 (英語群)

質問 #	最小値	最大値	平均	標準偏差	度数	質問 #	最小値	最大値	平均	標準偏差	度数
A 1	2	5	4.27	.74	68	B 19	1	5	3.82	.98	68
A 2	2	5	3.88	.76	68	B 20	2	5	3.97	.83	68
A 3	2	5	3.99	.74	68	B 21	1	5	3.32	1.11	68
A 4	1	5	2.91	.91	68	B 22	2	5	4.23	.77	68
A 5	1	5	3.59	.90	68	B 23	1	5	4.00	.90	68
A 6	1	5	3.96	.97	68	B 24	1	5	3.82	1.02	68
A 7	1	5	3.47	.87	68	B 25	1	5	3.77	.96	68
A 8	0	5.30	2.14	1.15	68	C 1	2	5	4.11	.76	68
B 1	2	5	4.06	.91	68	C 2	3	5	4.33	.68	68
B 2	2	5	4.32	.80	68	C 3	2	5	3.94	.84	68
B 3	1	4	2.83	1.02	68	C 4	2	5	4.49	.68	68
B 4	1	5	4.09	.93	68	C 5	2	5	4.52	.76	68
B 5	2	5	4.26	.72	68	C 6	1	5	3.92	1.03	68
B 6	2	5	4.02	.82	68	C 7	2	5	4.03	.85	68
B 7	1	5	3.36	1.06	68	C 8	3	5	4.15	.70	68
B 8	2	5	4.11	.82	68	C 9	2	5	3.94	.83	68
B 9	1	5	3.32	1.07	68	C 10	2	5	4.12	.82	68
B 10	1	5	3.85	.95	68	C 11	1	5	4.09	.96	68
B 11	2	5	4.03	.88	68	EC 1	3.52	4.40	3.99	.26	68
B 12	1	5	2.92	.97	68	EC 2	3.07	4.07	3.66	.29	68
B 13	1	5	3.85	.98	68	EC 3	3.33	4.43	3.77	.36	68
B 14	3	5	4.42	.75	68	ED 1	2.96	4.00	3.51	.27	68
B 15	1	5	2.33	.90	68	ED 2	2.63	4.35	3.60	.52	68
B 16	1	5	2.23	1.10	68	ED 3	3.42	4.43	3.79	.32	68
B 17	2	5	3.77	.86	68						
B 18	2	5	3.59	.83	68	TOTAL	3.36	4.30	3.87	0.27	68

5.2. 「発表課題アンケート」質問項目 A と「発表評価シート」の相関

初めに、「発表課題アンケート」質問項目 A と「発表評価シート」の相関係数をまとめた日本語群の表 10 と英語群の表 11 を参照されたい。

表 10 の日本語群では、「課題の「目的」や「評価基準」を意識して取り組んだ」(A 2) と「発表評価シート」のどの項目においても.2~.4 の弱い相関があることが分かり、準備段階において発表目的・評価基準を念頭に置くことが実際の評価と関連していることが示唆できる。同じく弱い相

関ではあるが「発表の「対象」がクラスであることを意識して取り組んだ」(A 3) においても対象となる聴衆を考慮することが内容の伝達において重要であることを暗に含意している。逆に「発表課題において「何が求められているか」がはっきりしなかった」(A 4) では全て「発表評価シート」のどの項目とも弱い負の相関となっているが、質問内容を考慮すると「何が求められているかがはっきりする」ことが評価につながる（相関がある）と逆に解釈可能であり、こちらも納得の行く結果となった。

表 11 の英語群では日本語群と異なり、学習準

表 10 「発表課題アンケート」質問項目 A と「発表評価シート」の相関係数（日本語群）

質問	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8
EC 1	.07	.28**	.17	-.08	.11	.08	.11	.09
EC 2	.00	.29**	.14	-.22**	.06	.05	.13	.04
EC 3	.03	.23**	.13	-.21**	.02	.01	-.00	.06
ED 1	-.10	.26**	.20	-.18	.06	.02	.05	.04
ED 2	.02	.29**	.13	-.24**	.03	.00	.06	.04
ED 3	.04	.25**	.22**	-.08	.10	.04	.03	.10
TOTAL	.05	.33**	.23**	-.17	.10	.08	.10	.08

** $p < .05$

表 11 「発表課題アンケート」質問項目 A と「発表評価シート」の相関係数（英語群）

質問	A 1	A 2	A 3	A 4	A 5	A 6	A 7	A 8
EC 1	.15	.14	.05	-.13	.10	.09	.02	.31**
EC 2	.05	.02	-.04	-.02	.05	.08	.04	.19
EC 3	.10	.12	.15	-.06	.13	.14	.12	.19
ED 1	.11	.12	.06	-.16	.12	.18	.12	.24**
ED 2	-.05	.02	-.04	.06	.13	-.08	-.11	.08
ED 3	-.10	.06	-.03	.10	.02	.03	-.15	-.02
TOTAL	.17	.14	.16	-.08	.13	.12	.07	.29**

** $p < .05$

備にあてた時間がプレゼンテーションの内容や伝達と相関があることが分かり、非母国語でのプレゼンテーション実施には、やはりその準備にある程度の労力が必要であることが分かる。

5.3. 「発表課題アンケート」質問項目 B と「発表評価シート」の相関

次に「発表課題シート」質問項目 B と「発表評価シート」の相関係数をまとめた日本語群の表 12 と英語群の表 13 を参照されたい。

表 12 の日本語群では、「全ての英文を日本語に訳す（全訳）」(B3) が「発表評価シート」の全ての項目と逆の相関になっていることに気づく。一見、日本語群において「日本語への全訳は有効である」と思われるが、おそらく全訳そのものが評価に結び付くことは難しく、全訳した内容を聴衆に伝えるための工夫（例えばポイントを押さえて要約、伝達するなど）がより必要であることが

示唆される。また、「発表評価シート」の内容面の全 3 項目と弱い相関関係にあるものに「背景知識として教科書以外の本やインターネットの情報を有効に使う」(B5) が挙げられ、プレゼンテーションの内容を深く掘り下げるには関連情報の収集がある程度有効であると指摘できよう。逆に、「英文を分けてチームで分担する場合は、それぞれが自分の担当する部分だけを読む」(B16) では全て負の相関となっているが、このような方法はプレゼンテーションの全体的な流れを分断する可能性があり、特に伝達面の評価項目において逆の相関が見つかったことは興味深い。さらに、「本文以外の情報（タイトル、イラスト、内容確認問題など）から内容を予測して読む」(B17) が全ての評価項目と弱い正の相関を示しており、言語的な本文のディスコースを超えて教科書の内容を最大限に利用・把握することがプレゼンテーションの評価に繋がることが分かった。

表 12 「発表課題アンケート」質問項目 B と「発表評価シート」の相関係数（日本語群）

変数	B 1	B 2	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10	B 11	B 12	B 13
EC 1	.10	.07	-.16	.00	.25**	.11	.18	.15	.18	-.12	.05	-.11	.13
EC 2	.08	.04	-.22**	-.04	.27**	.13	.26**	.28**	.20	-.07	.09	.03	.06
EC 3	.10	-.05	-.19	-.09	.28**	.10	.10	.25**	.12	.04	.03	-.02	-.00
ED 1	.07	.17	-.25**	.07	.17	.23**	.20	.08	.31**	-.14	.05	.05	.11
ED 2	.03	.02	-.29**	.02	.19	.21	.16	.20	.27**	-.21	-.00	-.07	.10
ED 3	.01	.04	-.02	-.06	.21	.01	.11	.20	.16	-.06	.10	-.12	.05
TOTAL	.06	.07	-.10	-.05	.26**	.14	.18	.20	.23**	-.07	.04	-.06	.10

変数	B 14	B 15	B 16	B 17	B 18	B 19	B 20	B 21	B 22	B 23	B 24	B 25
EC 1	.16	-.06	-.26**	.25**	-.20	.02	.19	.17	.05	.04	.10	-.03
EC 2	.12	-.04	-.12	.21	-.21	.07	.08	.06	.09	.06	.07	-.03
EC 3	.07	.05	-.02	.22**	-.17	.11	.10	.06	.06	.09	.09	.08
ED 1	.14	.10	-.22**	.27**	-.25**	.06	.14	.09	.03	.00	.02	-.07
ED 2	.05	.00	-.24**	.21	-.25**	.05	.09	.06	.05	.04	.07	-.03
ED 3	.16	-.03	-.22**	.22**	-.13	.09	.14	.16	-.01	.04	.02	.04
TOTAL	.16	.00	-.19	.24**	-.19	.10	.14	.17	.09	.08	.06	.03

** $p < .05$

表 13 「発表課題アンケート」質問項目 B と「発表評価シート」の相関係数（英語群）

変数	B 1	B 2	B 3	B 4	B 5	B 6	B 7	B 8	B 9	B 10	B 11	B 12	B 13
EC 1	-.12	-.03	-.15	.00	.05	.23	.14	-.07	.05	-.15	.02	.06	.01
EC 2	-.10	.00	.03	.15	.02	.20	.14	.00	.13	-.25**	.10	.03	.12
EC 3	-.24	.03	.14	.02	.11	.24	.12	-.11	.06	-.11	.11	.07	-.07
ED 1	-.21	.11	.02	-.00	.13	.34**	.22	-.04	.11	-.16	.06	.04	-.04
ED 2	-.16	-.06	-.02	-.10	-.14	.14	.07	-.25**	.04	-.12	-.05	.15	-.10
ED 3	-.26**	-.13	.02	-.02	-.05	.16	.06	-.08	.12	-.15	.07	.14	-.10
TOTAL	-.15	-.05	-.04	.07	.04	.15	.09	-.11	.01	-.10	.11	.12	.02

変数	B 14	B 15	B 16	B 17	B 18	B 19	B 20	B 21	B 22	B 23	B 24	B 25
EC 1	-.11	-.04	-.09	.05	-.03	-.15	.03	.21	.04	-.06	.04	-.02
EC 2	-.01	.09	-.13	-.02	.11	-.01	.11	.12	.11	.12	.07	.10
EC 3	-.05	-.07	.02	-.01	-.01	-.08	-.06	.02	.01	.00	-.02	-.06
ED 1	-.04	-.06	-.11	.03	-.04	-.11	-.04	.15	.06	.02	.09	-.06
ED 2	-.19	-.22	.01	-.14	-.20	-.17	-.15	.05	-.12	-.10	-.09	-.09
ED 3	-.23	.06	.04	-.11	-.14	-.05	-.21	.20	-.05	.03	.00	-.02
TOTAL	-.12	.04	-.02	.02	.03	-.14	.05	.14	.01	-.05	.02	.04

** $p < .05$

表 13 の英語群の結果においても興味深いことが分かった。初めに「英文を口に出して（あるいは心の中で発音して）読む」（B 1）は、特に評価項目「内容に関する質問に対して、納得できる回答があった」（ED 3）と有意に負の相関を示して

いるが、発表者が用意した原稿や教科書の英文を暗唱しても不意な質問に対しての受け応えにはあまり効果がないことを暗に示していると言えよう。つまり、準備段階でプレゼンテーションの題材として使用するテキストなどの内容から推測される

質疑応答のデモンストレーションを何度か実施しておく方が望ましいと言える。また、「細かい点はこだわらずに読み進め、大意（全体の大まかな意味）をつかむ」（B6）が「伝え方がうまかった（声、速度、流れ、アイコンタクト、聞き手への配慮）」（ED1）と有意に正の相関があることや、「辞書や文法書を有効に使う」（B10）、「何度も繰り返し読んで読む」（B14）、「英語を日本語にして、よくわからない場合は、その日本語の意味を調べる」（B19）などが全ての評価項目において負の相関を示していることから、実践的な英語プレゼンテーションを実施するには（1）英語による要約（英語による文脈理解）、（2）日本語への訳出は極力避ける、（3）ただ読むのではなく口に出して暗唱する、などが評価につながる重要ポイントであることが分かる。また、「面白いと思うところを重点的に読む」（B12）では全ての評価項目と正の相関がみられることから、重点的にポイントを押さえた伝達を心がけることは英語プレゼンテーションでも必須であろう。

5.4. 「発表課題アンケート」質問項目 C と

「発表評価シート」の相関

最後に「発表課題シート」質問項目 C と「発表評価シート」各項目の相関係数をまとめた日本語群の表 14 と英語群の表 15 を参照されたい。

初めに、表 14 の考察を進める。興味を持ったテーマであれば自らが積極的に調査を進め、当該テーマに関して自己の意見が自然と膨らんでいくのは自然の経緯であろう。よって、「担当した記事のテーマに興味をもつ」（C1）が「内容について自分の考えを述べていた」（EC2）と「教科書以外の関連情報を効果的に含めていた」（EC3）の双方において相関があることは納得が行く。一方、「他チームの発表を見て参考にする」（C4）や「発表の時間配分（20 分間の内訳や流れなど）を考える」（C7）、「オーディエンス（発表を聞き、評価する者）が学生であることを意識する」（C9）が全て弱い負の相関を示しており、評価とはあまり関連性がないように見える。C4 に関しては、参考にすべきプレゼンテーションが無かったのかどうかは検証できないが、異なった視点に立てば、他チームよりも自分のチームのプレゼンテーションに集中している姿が読み取れる。C7 に関しては、日本語でプレゼンテーションを実施するというメリットから、それほど時間配分を気にしなくても融通が利くという母国語の利点が伺える。C9 に関しては、聴衆が教員ではなくクラスメートであることから、それ程意識していない様子であることが分かる。

次に、表 15 の考察である。「オーディエンスからの質問をあらかじめ想定して、答えを準備する」

表 14 「発表課題アンケート」質問項目 C と「発表評価シート」の相関係数（日本語群）

変数	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	C8	C9	C10	C11
EC1	.04	-.08	.09	-.07	.03	-.16	-.09	.02	-.11	.03	.09
EC2	.27**	.06	.09	-.03	.01	-.05	-.04	.08	-.10	.00	.02
EC3	.26**	-.01	.19	-.12	-.05	-.06	-.08	.09	-.01	.07	.04
ED1	.17	-.17	.07	-.15	-.05	-.14	-.03	.01	-.14	-.02	.08
ED2	.07	-.11	.12	-.15	.00	-.17	-.11	-.01	-.06	-.01	.05
ED3	.19	.01	.16	-.10	.05	.03	-.08	.04	-.12	.02	.07
TOTAL	.16	-.02	.13	-.12	.04	-.04	-.09	.05	-.10	.03	.12

** $p < .05$

表 15 「発表課題アンケート」質問項目 C と「発表評価シート」の相関係数（英語群）

変数	C 1	C 2	C 3	C 4	C 5	C 6	C 7	C 8	C 9	C 10	C 11
EC 1	-.09	.10	-.07	.05	.13	-.04	-.23	.11	.02	-.04	-.21
EC 2	-.14	-.07	-.13	-.12	-.04	.02	-.17	.05	.01	-.06	-.27**
EC 3	-.05	.02	-.10	-.09	-.03	.14	-.13	-.06	.01	.07	-.15
ED 1	-.04	-.01	-.07	-.02	.08	.15	-.10	.03	.13	.03	-.16
ED 2	-.08	.03	-.09	-.08	.08	-.11	-.33**	-.14	-.22	-.08	-.23
ED 3	.02	-.02	-.08	-.07	.02	.07	-.15	.05	.05	.04	-.17
TOTAL	-.04	.08	-.08	.00	.03	-.01	-.25**	.11	-.03	-.00	-.22

** $p < .05$

(C 3) ことは、英語群の評価とあまり相関がない。この理由として、英語による質問の受け応えを事前に予測することは学生にとって想像以上に難易度が高く、その場で対応するしかない現状が垣間見える。また、「発表の時間配分を考える」(C 7) や「発表のリハーサルをする」(C 11) なども英語群では最終評価と相関がなかったことは興味深い結果と言えよう。無論、今回の調査ではデータ数が限定されており、また、統計的な相関だけで結論づけることには慎重にならなければならないが、評価者である学生が捉える良いプレゼンテーションとは何か、そしてそのようなプレゼンテーションに達成するまでの準備過程の関連性の一端が、本稿で明らかになった。

6. 結 語

考察の結果、日本語群と英語群の間には、本番までの準備期間において学習方略・学習態度に関していくらかの異なりが見られた。特に、「英文の読み」に関する項目では、教員側が指示しなくとも、日本語で内容の伝達を行う場合には従来型の訳読方式を採用し、英語で行う場合にはむしろ英語で内容を把握していることから、ポイントをまとめるオール・イングリッシュ方式を自ずと学習者自身で選択している結果となった。ゆえに、

学習者にはある程度の自律性が備わっているとも解釈できる。今後、教員側に求められるのは、このような学生の自律学習をより円滑にするようなタスクを考案することであり、語学科目におけるカリキュラム改変時にも、このような点を勧告すべきであろう。

最後に、学生が効果的な英語プレゼンテーションを実施するために、論者が考えるポイントを2つ紹介する。一つ目は、パワーポイントなど電子機器の操作に関する技術的サポート（スライドなどの作成も含めて）であり、現在の時流に合わせた実践的なプレゼンテーションのスタイルを授業内で教示して行く必要があるだろう。もう一つは、英語と日本語による伝達の違いを教示することであり、特にプレゼンテーションの内容を英語で簡潔に実施するためには、どのようなディスコースの構成を考えればよいか、実践的に教員自らが示して行く必要があるだろう。

註

- (1) 幸重他 (2007) では、専門学校の卒業プロジェクトとして学生に英語プレゼンテーションを課しており、現在の国際社会や企業の潮流に沿っていると言えよう。
- (2) 尚、欠損値を持つサンプルも加えると日本語群が 87 名、英語群が 68 名の計 155 名となる。
- (3) 後掲アンケート用紙参照。

参考文献

- JACET 教材開発研究会「大学一般英語教育における望ましい教材について」『大学一般教育英語教材に関する JACET 会員対象アンケート調査報告書』大学英語教育学会関西支部, 1998。
- 市川雅教「Question 42 相関係数の評価」繁榊算男・柳井晴夫・森敏昭編『Q & A で知る統計データ解析 Dos and DON'Ts』サイエンス社, 1999, 86-87 頁。
- 菅民郎『すべてがわかるアンケートの分析新版』, 現代数学社, 2000。
- 清川英男『英語教育研究入門：データに基づく研究の進め方』, 大修館, 1990。
- 三浦省五（監）『英語教師のための教育データ分析入門：授業が変わるテスト・評価・研究』大修館書店, 2004。
- 深山晶子他「「仕事で英語が使える人材」を育成する大学英語教育」椋平淳『ESP 教材開発に向けたコーパスの構築と、ジャンル分析理論の適用に関する基礎研究』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書（課題番号 15520378）, 2003。
- 仁科恭徳「英語プレゼン教材の妥当性, 評価, そして改善点：Power Presentation を例に」2010 年度 JACET 関西支部第二回講演会発表資料, 2010。
- 和田恒之『統計学セミナー資料 02』北海道対がん協会細胞診センター, 1999。Retrieved from <http://www.saturingi.gr.jp/seminar/statistical/vol 2.pdf>
- 幸重美津子・仲川浩世・大内和正・松村優子「卒業プロジェクトへの英語プレゼンテーション導入の勧め」『総合大学における英語プレゼンテーション教育の展開——神戸大学の取り組み——』神戸大学国際コミュニケーションセンター, 2007, 113-126 頁。

発表課題についてのアンケート（期末）

回答者氏名 _____

このアンケートは、英語教育の中で発表課題をどのように行うべきかを検討し、今後の改善に生かすことを目的としています。成績評価には一切関係ありません。ご協力よろしく願います。

〔問 A〕

発表課題を振り返り、次の各項目について、あなた自身があてはまる度合いを5段階で示してください。

1. 今回の発表課題に前向きに取り組んだ
2. 課題の「目的」や「評価基準」を意識して取り組んだ
*目的：教科書各 Unit の英文からクラス全体が正しく情報を得てそのテーマについて考え、知識や関心を深める。
3. 発表の「対象」がクラスであることを意識して取り組んだ
4. 発表課題において「何が求められているか」がはっきりしなかった
5. これまでの英語学習とは異なる取り組み姿勢や方法が必要だと感じた
6. 発表課題に取り組んだことは、有意義な（ためになる）経験であった
7. 英文の情報内容に対して、自分の考えを持つようになった（critical reading）
8. この発表課題の準備にあなたが費やした時間は、およそ _____ 時間 _____ 分

〔問 B〕

今後、同じ発表課題を行うとすれば、より高い評価を得るために、どのような準備が必要だと思いますか。

5段階（5かなり必要、4まあ必要、3どちらともいえない、2あまり必要でない、1必要でない）で示してください。

〈教科書の英文の読み方について〉

1. 英文を口に出して（あるいは心の中で発音して）読む
2. 大切と思うところに印をつけたりして読む
3. すべての英文を日本語に訳す（全訳）
4. 重要なところなど、一部の英文を日本語に訳す
5. 背景知識として教科書以外の情報（インターネットなど）を有効に使う
6. 細かい点はこだわらずに読み進め、大意（全体の大まかな意味）をつかむ
7. 英文を日本語に訳さずに、英語のまま理解する
8. 段落ごとに内容の区切りを意識して読む
9. 辞書はできるだけ使わず、文脈から意味を推測しながら読む
10. 辞書や文法書を有効に使う
11. 重要な語句や英文を覚える
12. 内容のすべてではなく、面白いと思うところを重点的に読む
13. 質問の出そうな所、わかりづらいところを重点的に取り上げて読む
14. 何度も繰り返して読む
15. 第一段落を丁寧に読んで、続きは、さっと流し読みする
16. 英文を分けてチームで分担する場合は、それぞれ自分が担当する部分だけを読む
17. 本文以外の情報（タイトル、イラスト、内容確認問題など）から内容を予測して読む
18. 品詞や文の構造などに注意を払い、文法的に分析しながら読む
19. 英語を日本語にして、よくわからない場合は、その日本語の意味を調べる
20. 発音がわからない単語は、発音を調べて発音する
21. わからないところを調べるのに英英辞典を活用する
22. 誰（書き手）が、誰（読み手）に、何を伝えようとしているのか（目的）を意識して読む
23. 内容をイラストや図表など視覚的にイメージしやすい形に整理しながら読む
24. 内容を英語で要約する
25. 内容を日本語で要約する

〔問 C〕

1. 担当した記事のテーマに興味をもつ
2. チーム内で役割分担や段取りについて話し合う
3. オーディエンスからの質問をあらかじめ想定して、答えを準備する
4. 他チームの発表を見て参考にする
5. 分かりやすいハンドアウト（配布する発表資料）を作る
6. 発表原稿（発表時に話す内容のメモ）をしっかりと書く
7. 発表の時間配分（20分間の内訳や流れなど）を考える
8. チーム内で英文の理解に誤りがないう確認しあう
9. オーディエンス（発表を聞き、評価する者）が学生であることを意識する
10. 準備に使える時間を多く確保する
11. 発表のリハーサル（予行練習）をする